



序

今からちょうど100年前、1925年のラヴェルの手紙はとても興味深い。管弦楽作品のスコアの校正にかかりっきりで他の作曲がストップしてしまい、関係各所にお詫び状を書き連ねているのである。オペラ「子供と魔法」のモンテ・カルロにおける同年3月21日の初演以後に、26年初めにパリ初演を控えていた。

エリザベス・スプレীগ・クーリッジ夫人に対しても、「・・・この夏はあなたとお約束した2曲の『マダガスカル島民の歌』と約2年前から書いている『ピアノとヴァイオリンのためのソナタ』を終えるためにモンフォールを離れていません。しかしこれらを断念せざるを得ません。この間ずっと、管弦楽譜の校正と、その後はパリ・オペラ・コミックにおいて1月23日に上演する「子供と魔法」のリハーサルの指揮に費やされたのです。約束を守れないことをどれほど後悔しているかお察しください。・・・遅れているだけで4月ごろには仕事に戻るつもりです。」（1925年12月19日付、telガリマール社出版「モーリス・ラヴェル書簡、執筆、インタビュー集」II/2031・部分拙訳）

フランス語は永い間、世界共通の法律用語であった。時制の表現の豊かさや言葉で書き表せないものはないと言わんばかりの理論的な書式を擁しているからである。そういうこともあってか、西欧の中でもフランスはとにかく手紙を交わすことが、人間関係にとってとても重要である。筆者も留学の初年度に、まだ年末にレッスンに行くのだからと勝手に構えて、師事した教授にクリスマス・カードを送らないでいたところが、12月に入ってすぐのレッスンで訪れた師のピアノの部屋には、すでに壁じゅうに門下生や知人親戚からのカードがところ狭しと貼られていた。カードを送らなかった無礼と恥ずかしさで冷や汗をかいた、にがい思い出である。

ラヴェルも実に筆まめであった。生涯150年記念に新しく書簡集が出て、出

版社デュラン社長とのやりとり、友人との意見交換、演奏会の感想や自身の活動報告などありとあらゆる事柄が多数の人との文通に書かれていて、読んでいるとラヴェルの生活が垣間見られて面白い。前出の手紙もその中の一つである。ブーランクやドビュッシー、フォーレなども結構な分量が書籍にまとめられているが、今回のラヴェルの記念本は厚さ5センチ強のB6版全2巻で、特別ボックス入りという豪華版である。

真のラヴェル

さて、そこにもしばしば吐露されているラヴェルの内面の話をしよう。ラヴェルは、几帳面で神経質な人だった。パリ郊外のモンフォール・ラモリに建てた終の住処“ベルヴェデーレBelvédère”（元々イタリア語で展望台）は、いわゆるおひとりさまのお城のようだ。現在は博物館として公開されている。全ての居室が自らの趣味で飾られていて、ピアノの部屋には大好きだった母マリーの肖像画が中心に据えられている。シャイで皮肉やで、寂しがり屋であったラヴェルは、愛する母を心の支えにしていたから、1917年に母が亡くなった頃の憔悴は大変なものだったという。ラヴェルのピアノ椅子にすわると、温かく包みこむようにマリーが微笑みかけてくれる。

風呂場と洗面所は、黒白で統一されて、鏡の前には髭がサミなど顔を整える一式が綺麗に並ぶ。1937年に主人が亡くなってから88年経っても、今朝ラヴェルがそこで髭を剃ったのではないかと思うほどその雰囲気は変わっていないし、そこにはまだラヴェルは生きているのだと思わせる空気が漂っている。

ラヴェルのこの几帳面さは、フランスとスイスの国境あたりを出身地とする父ジョゼフの鉄道技官としての緻密な仕事ぶりの気質を受け継いでいるのであろう。音楽愛好家だった父は、ラヴェルの音楽への道をやさしく切り拓いた。

ラヴェルの音楽の源

ラヴェルはその名を冠した国際夏季音楽祭が毎年行われるフランス南西部の漁村サン＝ジャン・ドゥ・リュズからほど近いシブールに生まれた。その建物が絵葉書にもなっているが、本当は出産のために故郷に帰るというバスク人の慣習があり、母が帰省中に、そのアパートマンの管理人（コンシェルジュ）を務めていた姉（妹）のところに遊びに行っている時に産気づいて、その場でラヴェルを産み落としたという説もある。その出産の後、ラヴェル生後3ヶ月で家族はパリに赴いた。

母は、スペイン系バスク人であった。バスクといえばフランスとスペインを跨いだ独立した民族で、その血は濃く、同胞同士の絆は深い。そして舞踊もたくさんの種類が残っていて、今でも祭りには人々がこぞって踊り、楽しむ姿が見られる。

8月15日の聖母マリア昇天祭の日に筆者は当地を訪れたことがあるが、日本の祇園祭を彷彿とさせる山車が練り歩き、音楽や舞踊がそここの路地で披露されていた。

“ハイアライ”や“ペロタ”というスポーツ競技を楽しみ、黒や紺色のベレー帽をかぶっているバスク人たちの交流には、一方で即興的に語られる詩歌を音楽に乗せるという伝統があるという。その詩歌の韻律の一つに、13音節のシラブルで構成されるゾルティーコ・ツィキアがある。本来は“小さい即興詩”という意味を持つゾルティーコ・ツィキアであるが、実はゾルティは8と訳され、ちょうど「ピアノ三重奏曲」(1914)第1楽章のピアノで始まる序奏の、8分音符を基本にしたリズム、3拍+2拍+3拍がそれに当たる。そしてこの楽章がなぜ8分の8拍子という珍しい拍子表記なのかという謎がこれで水解する。さらにこのリズム型の特徴として2拍目にアクセントが付くとい

うから、その冒頭部分はゾルティーコ・ツィキアそのものである。なお、ゾルティーコは“5拍子の踊り”と示す辞書もあるが、それは同曲第4楽章の4分の5拍子にぴったりで、ゆったりとした5拍子であるものの、バスク舞踊の拍子に基づいているのである。

これほど、バスク音楽が母の影響でラヴェルに染み付いていて、色々な作品に用いられているということがお分かりいただけたであろう。

語る唄、彩譜

バスク人の“即興詩”にまつわるのは、ラヴェルの歌曲創作の趣向にも大きく影響している。歌曲集「博物誌」も「マダガスカル島民の歌」（メゾ・ソプラノ、フルート／ピッコロ、チェロ、ピアノ）も、歌曲というよりもオペラのレシタティーヴォやシュプレヒヒゲザング（ドイツ語で“話す歌”）のような作曲手法で書かれているのは偶然ではないであろう。

微細な細工のおもちゃや工芸品が大好きだったラヴェルが小説「にんじん」で有名なジュール・ルナールの詩集「博物誌」に自分の音楽の発露を見出したことはまことに幸運で、このコラボレーションは大傑作を生み出した。ルナールの観察力と、対象の生きとし生けるものたちに愛情を込めて文章化する力量も際立って高いが、ラヴェルが音楽で虫や鳥や動物の仕草を実に巧妙に表現しているのも見事である。ひょうきんな鳥や虫たちの動きや表情に、ラヴェルの和声感覚がピッタリと符合しているのも素晴らしい。

ラヴェルのピアノ曲

「古風なメヌエット」、「グロテスクなセレナーデ」、「亡き王女のバヴァース」、「水の戯れ」と献呈してきたリッカルド・ヴィニェスがラヴェルの親友であった。そしてヴィニェスのテクニックと表現力の高さがラヴェルの想像

力を掻き立てたことも間違いない。スペインのカタルーニヤ地方生まれのヴィニェスだからこそ、ラヴェルの音楽の内面を瞬時に理解できることもあったであろう。“アバッシュ”（ならず者）というグループと一緒に作ったのもこの二人が中心である。名付けたヴィニェスと共にちょっと悪びれてみるところもラヴェルらしい。アカデミックな考えによって音楽界が保守的になることに警鐘を鳴らし、新しい創作、たとえば1902年初演のドビュッシーのオペラ「ペレアスとメリザンド」を後押しするような意図があった。

ピアノのための「ソナチネ」（1903-05）は、ラヴェルの心を許した友、イダとシーバ・ゴデアスキ夫妻に献呈され、非公開ではラヴェル自身とボール・ドゥ・レスタン夫人が続いて初演し、パリでは第337回国民音楽協会演奏会においてスコラ・カントゥルムのホールで同校の教授、ガブリエル・グロブレーズが公開初演した。「ソナチネ」の冒頭はラヴェルがとりわけ好んだ4度音程の下行で始まるが、下行した音が長い音価になっていて、2拍目にアクセントがあるというゾルティーコのリズムの特徴がここにも現れている。

フランスのタバコ「ジタン」

一昔前は、青色の包装紙のジタンやゴロワーズをフランスの映画俳優が吸っているのがとても絵になったものである。今ではジタン（ジブシー）はロマと称さなければならないし、タバコも肩身が狭くなっている。そのジタン・ブルーの包装紙には、ロマの女性がくると踊っているデッサンが描かれていた。そしてこれこそが、「ツィガース」のイメージである。そういえばビゼーのオペラ「カルメン」も主人公はタバコ工場で働いているという設定であった。つまり「ツィガース」のイメージは、カルメンと思ってお聴きいただくのはどうであろう。筆者の持論としてはヴァイオリン独奏で始まるあの激しい冒頭

はロマ女性の感情の高まり、続いて現れる“バスクの歌”、そして目眩く世界へと誘うようなピアノの出現部分こそがバスクの女性の妖艶な内面なのではないか。

実は研究者によると、同曲初演者のハンガリー人ヴァイオリニスト、イェリー・ダラーニから着想を得て、ラヴェルはハンガリーのロマの音楽性を取り入れていると言われている。確かに最初のゆっくりしたラッススと速いフリスカから成っていることと、本来はリュテラルという金属の装置をピアノに取り付けて金属的な音色を用いて、ツインバロンのような効果を持たせていたことから、ハンガリー風ということも一理ある。もちろんハンガリー風ラプソディとして聴くのも一興である。

若きラヴェルの内面的な心持ちや、4〜50歳代の成熟の筆捌き、そして一生涯続くバスクとの深いつながりが浮き彫りになる今回のプログラムを聴いて、生涯150年を演奏家とともに心から祝おうではありませんか。

なお、「ソナチネ」の調性も「ピアノ三重奏曲」の調性も、筆者はそれぞれ嬰へ調、イ調を推奨したい。なぜなら、ラヴェルの耳には旋法が響いていて、短調という調性は聞こえていなかったはずである。

野平多美（作曲家・音楽評論家）